

〔論 説〕

漢学の革命と革命の漢学

—遠藤隆吉の『漢学の革命』をめぐる—

趙 軍

漢学の日本での由来は古く、その学問的蓄積の多さと漢学者たちの教養の深さは中国を除くほかの国々に誇るべき境地に達している。清朝晩期の外交官・詩人黄遵憲が至近距離で近代日本を観察した感想を『日本雑事詩』に記録し、その中に日本の漢学の繁盛ぶりと漢学者たちの造詣を下記のように絶賛した。

「西条書記考文篇、 西条の書記（山井鼎）の考文篇
曾入琳瑯甲乙編。 曾つて琳瑯（乾隆帝の文庫）の甲乙編に入る
道学儒林尋列伝、 道学・儒林 列伝を尋ぬれば
東方君子国多賢。 東方の君子国は賢多し」⁽¹⁾

しかし一方、黄遵憲はまた明治維新以降の日本において、大勢の日本人が西洋文明を取り入れることに没頭し、「年来西学大行、各藩文廟或改為官署、廢棄者半。一二漢学之士、潦倒不得志於時、猶硜硜抱遺編、守祭器、可哀也已」（近年、西洋の学問が大いにおこなわれたために、各藩の孔子廟が役所に改められたり、とりはらわれたものが半分はある。一、二の漢学者は、落ちぶれて、時に志をえないけれども、やはりおどおどしながら経書をいただき、祭器をまもっているが、きのどくなことである）⁽²⁾といった西洋化の風潮が盛んになり、漢学が衰退の一途をたどっている時代の変化を目の当たりにした。

漢学が近代日本において、衰退の運命にさらされる理由について、黄遵憲は「維新以来、広事外交、日重西法、於是又斥漢学為無用、有倡言廢之者。雖当路諸公知其不可、而漢学之士多潦倒擯棄、卒不得志（維新以来、外交を広く展開し、西洋のやり方を重んじ、漢学を無用な長物を見なし、廢棄すべきだと唱えた者も現れた。政府の権力者はその不可を知りながら、漢学の士人の大半はすでに落ちぶれて、鬱々として志を遂げられないでいる）」⁽³⁾と述べ、「西洋文化」の前に漢学を代表とする「東洋文化」が「無用」な学問と見なされ排斥されることがその理由の一つであり、その上、「而究其拘迂泥古、浮華鮮実、卒歸於空談無補。有識之士、固既心焉鄙之。一旦有事、終不能驅此輩清流、使之誦經以避賊。復見西人之槍砲如此、聞其国富強又如此、則益以漢学者流為支離無足用、於是有廢之之心（彼らは古い觀念にとらわれ、うわべを飾り立て、結論は常に机上の空論に帰す。有識者は固より心から彼らを軽蔑している。一旦有事の場合、これらの清流輩に經典を読ませて敵軍を退けることはできない。且つ西洋人の銃砲の猛威と国力の富強さを見て、益々漢学者ら

(1) 黄遵憲「日本雑事詩」六九、陳錚編『黄遵憲全集』上、中華書局2005年、28頁。日本語訳は実藤恵秀・豊田穰訳『日本雑事詩 東洋文庫111』平凡社昭和43年、114頁。

(2) 黄遵憲「日本雑事詩」七二、陳錚編『黄遵憲全集』上、中華書局2005年、29頁。日本語訳は実藤恵秀・豊田穰訳『日本雑事詩 東洋文庫111』、121頁。

(3) 黄遵憲「日本国志」卷三十二・學術志一、陳錚編『黄遵憲全集』下、中華書局2005年、1404～1405頁。

を無用の輩と見なし、廃棄する念が生じる所以である)」⁽⁴⁾と、漢学と漢学者自身が「伝統」にこだわる余り時代の変化に対応できなくなったことももう一つの理由であると指摘した。

黄遵憲の指摘したこの二点の理由は、「伝統へのこだわり」=「保守的姿勢」→「進取的近代社会への対応の遅れ」=「役に立たない学問」という「時代の結論」という図式でまとめることができる。表面的には問題点が二つ存在しているように見えるが、実際は内部で繋がっている一つの思想的・文化的課題、すなわち、漢学の「近代化課題」である。これこそ近代に入ってから漢学が衰退の一途にたどった根本的な理由である。五・四運動と「新文化運動」の中に中国の知識人たちが「打倒孔家店」を「新文化」提唱の旗印にしたことから見ても、これは日本だけの課題ではなく、漢学の「本場」である中国においても、同じ文化的・時代的課題に直面していた。

その後の歴史から見れば、漢学の近代化という時代的課題に対しては近代日本の漢学者たちの動きが早く、とりわけ1870年代から1910年代までの間、井上哲次郎、市村瓚次郎、林泰輔、遠藤隆吉ら研究者が漢学に対する反省と改造についてさまざまな試みを行った。本稿は『漢学の革命』（東京育英舎、明治四十四年）を対象として、漢学者・社会学者・教育家など多方面に活躍した遠藤隆吉の「漢学革命論」の概略を整理していきたい。

一、漢学が「有用」か、「無用」か

「漢学無用論」は「文明開化論」と表裏一体の文化的価値観であり、儒学文化中心の国々にとってイデオロギー面での一大転換であった。その転換を促した最大の原動力は「西洋文化」の浸透と影響であった。

1876年1月、朝鮮の宗主国問題で中国に派遣された29歳の青年外交官森有礼は、河北省保定にある直隸総督官邸に赴き、清朝外交の実質的責任者である李鴻章を訪ね、国際法などについて議論した際、東西文化の優劣論も話題の一つであった。森は「西国所学十分有用、中国学問只有三分可取、其余七分仍係旧様、已無用了（西洋の学問は十割役に立ますが、中国の学問は僅に其三割が有用で、余の七割は已に旧式で役に立ちますまい）」と述べ、「中国学問」が近代社会においてすでに無用な長物であるという認識を示した⁽⁵⁾。

このような価値観の大転換は、明治政府の上層部や知識人の一部にとどまらず、漢学の教養が深いいわゆる「旧式」日本人知識人の中にも広がりつつあった。

例えば、1884年5月から1885年4月まで中国各地を訪問した岡千仞は、多くの中国知識人らが古い伝統的学問を固守する姿を見て、「方今風氣一変、萬国交通。此五洲一大變局、而拘儒迂生、輒引經史、主張陋見、不知宇内大勢所以至此（方今、風潮が一変し、萬国がこもごも通ずるようになった。これは全世界の一つの大きな変化の局面なのだが、見識の狭い読書人や時代遅れの者たちは、事あるごとに経書や史書を引いて、浅はかな見解を主張し、宇内の大勢が今のような状況に至った所以を知らない）」⁽⁶⁾と嘆き、儒教の經典と呼

(4) 黄遵憲「日本国志」卷三十二・學術志一、陳錚編『黄遵憲全集』下、1409頁。

(5) 「(二) 附件八 李鴻章與森有礼問答節略」、中国史学会主編『中国近代史叢刊 中日戦争』(一)、上海人民出版社・上海書店出版社、2000年、299頁。日本語訳は王芸生著、末広茂雄監修、長野勲・波多野乾一編訳『日支外交六十年史』第一巻、建設社、昭和8年、137頁。

ばれる「六経」を中国で氾濫していたアヘンと共に「毒」と呼び、「余私謂、非一洗烟毒与六経毒、中土之事、不可下手。六経有可信者、有不可信者。苟信不可信者、流毒無所不至（私は個人的には、阿片の毒と六経の毒とを洗い流さない限り、中国のもろもろの事は、手の下しようがないと考えている。六経には信ずることのできるものもあるが、信ずることのできぬものもある。もし信ずることのできぬものを信じたならば、至る所に毒が流れてしまう）」⁽⁷⁾と書いた。

また、岡が清末の考証学者・文人俞樾の弟子王夢薇〔廷鼎〕と学問談義をした時、王は「聖人之道、自有致富強之法。貴国不求于此、而求於彼、殆下喬木、而入幽谷者（聖人の道には、おのずから富強を成し遂げる方法が備わっています。貴国がこちらに求めず、あちらに求めているのは、ほとんど喬木を下って幽谷に入るようなものです）」と日本の欧米に学ぶことを非難した議論に対して、岡千仞は「嗚呼陸有輪車、海有輪船、網設電線、聯絡全世界之声息。宇内之变、至此而極矣。而猶墨守六経、不知富強為何事、一旦法虜滋擾、茫然不知所措手、皆為此論所誤者（ああ、陸には汽車があり、海には汽船があり、電線を網の目のように張り巡らして、全世界の動静をつなぎ合う。宇内の変化は、このような段階に至り、極まっているにもかかわらず、なおも六経を墨守し、富強の何事たるかを知らず、一旦法虜が騒ぎを起こすと、茫然として対処の仕方を知らないのは、すべてこのような論に誤られているのである。）」と反論し、世の中の変化を見ず、六経を墨守する中国知識人らの迂闊さを批判し、中仏戦争に喫した大失敗の病因はまさにここにあると指摘した⁽⁸⁾。

つまり、明治初期の日本において、朝野を問わず、「漢学無用論」のような考え方はすでに多くの人々に浸透し、次第に社会の共同認知の一つになりつつあった。知識認知に関する価値観のこの大転換は、日本社会における「伝統的学問」としての漢学にとって、まさに危機的局面であった。

遠藤隆吉の『漢学の革命』は、このような「漢学の危機」に直面して打ち出した対策の一つと思われる。

漢学は本当に没落の一途に陥り、固有の学問としての輝きと社会に対する影響力を二度と回復できなくなってしまったのか？

遠藤隆吉は自身が受けた教育により、漢学の素養（儒教思想、易経研究、東洋倫理学など）を持ちながら、社会学、心理学、教育学、ヨーロッパ哲学、政治学など近代西洋文化に関する造詣も深かった。そのため、彼は「漢学の危機」について考える時に、多角的な視点による観察を重んじていた。

『漢学の革命』の中で、遠藤隆吉はまず漢学の二面性について問題提起し、伝統的漢学には「善」と「悪」という二つの側面があり、近代社会を生きる人々にとって、それを見分ける眼力が必要であると力説した。

(6) 岡千仞『観光紀遊』巻三、明治19年。日本語訳文は、柴田清継ほか「岡鹿門『観光紀遊』訳注——その四」、武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻〔編〕『日本語日本文学論叢』11号、2016年2月、68頁。以下同。

(7) 岡千仞『観光紀遊』巻三。日本語訳文は、前掲「岡鹿門『観光紀遊』訳注——その四」、68-69頁。

(8) 岡千仞『観光紀遊』巻三。日本語訳文は、前掲「岡鹿門『観光紀遊』訳注——その四」、81頁。「法虜」とはフランス軍を指す。

「漢学の二字は一面陳腐固陋なるが如く、一面剛健不拔なるが如く善と悪との両極端なる聯想を同時に起し、所謂Xの範域なるを以て善と思へば善、悪と思へば悪、何れにも解釈せられ得べければなり。」⁽⁹⁾

漢学の全般をすべて「悪」であると思えば、「漢学無用論」に陥りやすく、すべて「善」と思えば、逆に伝統的学問を「墨守」する立場に陥ってしまう。どちらも時代の需要に対応しきれない姿勢になるので、弁証法的視点で漢学を二分する視点は実際もっとも合理的・科学的手法になる。

遠藤は漢学の中核的存在である孔子の思想を例として取り上げ、その主張の中の「陳腐固陋」な一面はすでに近代社会に適應できないものがあるため、それを取り出した上で継承すべき対象から外せばよいと提案した。

「孔子は封建時代の人であつたからして、孔子の言は必しも人民を重く見ない方の側で、例へば民可使由之、不可使知之と言へるが如きは、決して今日の社会に於て言ふべきことではない。……今日の日本の如き社会に当筈まらぬものがあり、又足らぬものがあると言ふことは明らかである。」⁽¹⁰⁾孔子は「肉あり血あり人間として尊んで居るのである。故に其尊ぶべき所を尊んで居るだけのことである。直ちに孔子のものであるからと云ふて、一から十まで辯護するといふ必要はないと思ふ。」⁽¹¹⁾

すなわち、「君」と「臣」のみが存在し、「国民」と「人民」が存在していなかった時代を生きた孔子に対して、「民主」「人權」に合致する発言を期待することはそもそも無理難題であり、歴史的人物と歴史的文化遗产に対する正しい姿勢ではない。現代人にとっては、孔子のように封建制度に束縛される必要がないため、むしろ政治的立場と時代の制限から遊離し、孔子思想の中の恒久的意義を持つ栄養要素を見いだす作業が重要である。そうすることで、現代人ははじめて孔子の思想の眞の価値を眺める学術的「自由」を獲得することができる。「漢学の革命を論ずるに於ては此点に注意すべきであると思ふ。」⁽¹²⁾

岡千仞の「六経有可信者、有不可信者」という考えは、曖昧な表現ではあるものの、すでに儒教經典の中に潜んでいる「負の遺産」の存在を指摘した。しかし、漢学に対する遠藤隆吉の二分法は、比較の視点、両面性による物事への観察法の二点で岡千仞よりさらに一歩前進し、漢学批判の「自由」を手に入れた研究姿勢であると言えよう。

五・四運動と新文化運動の暴風雨を経た中国では、毛沢東が主に政治学の立場から『新民主主義論』などの論著の中に、儒学など伝統的学問には「精華」（遠藤隆吉の言う「善」の部分）と「糟粕」（遠藤隆吉の言う「悪」の部分）が併存し、前者を「継承」し、後者を「揚棄」（止揚）しなければならないという「二分法」を提唱したことがあり、中国の文化人たちがその方針に従って1940年代以降さまざまな模索を行ってきた。しかし、文化大革命後期の1970年代になると、毛沢東は特定の政治的目的から儒学を批判する「批林批孔運動」を引き起こし、「路線闘争の敵」である林彪を批判するために孔子とその学問をも陪葬させた。これはもちろん毛沢東の伝統文化に対する姿勢の大きな変更と路線修

(9) 遠藤隆吉『漢学の革命』（東京育英舎、明治四十四年）、「序」頁一。以下、同書を『漢学の革命』と略す。

(10) 『漢学の革命』、頁七〇。

(11) 『漢学の革命』、頁七三。

(12) 『漢学の革命』、頁七三。

正であるが、また、彼が最初から「精華」と「糟粕」の内容をはっきりと区分しなかったことにも原因している。

漢学の中の「悪」の成分を取り除けば、「善」すなわち有用性の部分は顕れる。しかし、漢学は中国をふるさととする伝統的学問である以上、日本人とりわけ近代社会を生きる日本人にとって本当に有益なものなのか、どれほどの「有益性」があるものなのかとは、自然に出てくる疑問である。遠藤隆吉は、

「自分の見る所では、漢学も亦日本人に取つては種々の利益がある。即ち日本国の文明の淵源を知らせるといふ意味に於ても、また文字を知らせるといふ意味に於ても、日常の道徳を知らせるといふ意味に於ても、精神修養法を教へるといふ意味に於ても、皆人間の利益ある所のものである。其上人間の思想を高尚にするといふ所に非常に意味がある。」⁽¹³⁾

と言った。つまり、漢学は古代中国知識人たちの知恵の集約だったが、人間の自己修養や社会生活、政治・経済・文化活動など多方面にわたり基本的または根本的な原理・作法などを内包しているため、中国人だけではなく、日本人や世界の人々にも有益性を持ち、「皆人間の利益ある所のものである」。そして、漢学者は漢学に涵養している有益性を明らかにし、実践活動を行うことが「肝要であり」、これこそ、「漢学の革命と謂ふことの目的は達せられる訳である。」⁽¹⁴⁾言い換えれば、「実践」「運用」することを第一義的に取り扱うことは、伝統的漢学の問題点を克服する漢学の「再生」であり、「漢学の革命」である。

二、漢学の革命

漢学の革命を論ずるとき、遠藤隆吉は伝統的漢学教育とその応用に関する問題点を指摘し、漢学の思想面での精髓の所在、すなわち漢学の革命の必要性をめぐって2つの基軸から議論を展開した。

漢学のような伝統的学問の近代性に対する価値観的判断について、「善」と「悪」の議論は一つの思想的・文化的システムとして、方法論の角度からの分析は不可欠である。どの思想・文化にもそれぞれの長所と短所があるのは言うまでもないが、漢学のような「東洋的」文化が悠久なる歴史の伝承と深厚なる知見の蓄積を持つ反面、「西洋」の近代文化にある合理主義や検証主義などいわゆる「科学的精神」と「科学的手法」に欠けていることは事実である。その結果、「東洋文化」において、事実に基づいた客観的観察結果より物事の表象に基づいた主観的感想が多く、また、より良い未来を求め続ける「未来志向」と古き良き過去へのこだわりの「尚古主義」も、西洋文化と東洋文化の指向性における大きな違いの一つである。

東洋の思想に存在しているこうした弱点をはっきりと認識すべきことは重要であると、遠藤隆吉は考えている。

「西洋の学問は一面に於ては科学即ちサイエンスがあつて、此サイエンスが次第々々に進歩して来たものであるからして此方面に於ては少しも尚古といふことがない。未

(13) 『漢学の革命』、頁七。

(14) 『漢学の革命』、頁八。

来々々といふて、望を未来に属して益々発達せんことを希望して居つたのである。西洋の進歩主義なることは即ち此所に帰着する。所が東洋に於ては漢学は只管古代のものばかりを望んで凡ての方面に於て古代を理想とすることになつて居る。これが東西洋相違なるの甚しき所である。⁽¹⁵⁾

漢学などの東洋思想の長所と短所を合わせて観察することは、漢学を全面的に理解するには必要不可欠な視点であり、同時に漢学の近代化つまり「漢学の革命」を行う際重要な準備作業の一つでもある。

「文明開化」を標榜し、西洋文明を全面的に取り入れることを特徴とする明治維新前後の日本でさえ、「漢学」が生命力を維持できたのは、その長所が発揮されたため、逆にさらなる発展が実現できなかったのも、その短所があるためであると遠藤隆吉も指摘している。

「維新以来浜びんとして風前の灯の如くなりし者が復たび生命を取り留めて、縦ひ旺盛ならずとするも能く識者の精神を支配しつゝある所以の者は何等か其の長所あるを以てに外ならず。其の大に盛んなるに至らざるも亦何等か其の短所あるを以てに外ならず。」⁽¹⁶⁾

ここでの「識者」が誰を指すのかについて、具体的な説明がないが、明治維新運動に直接・間接に関わった思想的啓蒙家や政治家を指しているだろうと考えられる。

しかし、日本の漢学教育での知見伝授の方法に関して、やはり幾つかの問題点が存在しており、そのままを放置すると、漢学教養のレベルを下げたり、存在価値の認知を損なったりする恐れがあると遠藤隆吉は見ている。

伝統的漢学教育の問題点のその一は、「書物の講義」であるという。

「昔から漢学の講義といふと皆書物の講義と極まつて居る。」ここでいう「書物の講義」とは、もっぱら漢籍の文章や文字を講読する教育法である。しかし、漢籍の書物は時代的距離感が大きいだけでなく、その文章も大変難解のものであり、「斯の如くと首ツ引であるからして、漢学の講義を聴きに行くのは余程億劫である。」⁽¹⁷⁾「書物の講義を仕始めるからしてそれでは直に聴衆をして厭かして了ふ。」⁽¹⁸⁾聴衆（学生）の立場から考えると、遠藤隆吉は「書物の講義」は聴衆の勉学意欲をすり減らす重要原因であると考えていた。

伝統的漢学教育の問題点のその二は、「文字の学問」であるという。

おそらく実体験の話と思われる代表例だが、「田舎に行つて見ると、田舎の漢学先生が必ず訪ねて来て、何か議論でも仕掛けるかと思ふと云ふと、十八史略の隅の方にある解らない文字を持つて来て、此文字は何であるかと問ふ。其時其文字が解らぬといふと、東京の学者のくせに誠に無学だと言うて心に嘲つて、共に談ずるに足らざるものとして帰つて了ふ。」⁽¹⁹⁾「つまり漢学者は字引の様なもので、生字引と漢学者とは同じだと謂うても宜い位になる。……これが先づ田舎学問や又は古代に於ける漢学者に対する一般の考えであ

(15) 『漢学の革命』、頁一三。

(16) 『漢学の革命』、「序」頁一。

(17) 『漢学の革命』、頁一～二。

(18) 『漢学の革命』、頁三五。

(19) 『漢学の革命』、頁二～三。

つたのである。』⁽²⁰⁾確かに、中国においても、もっぱら文字の解釈に没頭する儒学の学派もあった。「支那では、漢唐の頃は所謂訓詁学といふものが盛んで、文字の注釈ばかりに骨を折つたのである。それで日本の漢学者も亦此流れを汲んで、漢学といへば即ち文字の解釈をするのである。……単に文字の解釈のみが漢学の特徴であるかの如くなるのは面白からざる現象であると思ふ。』⁽²¹⁾実際、文字の解釈だけに没頭する学派の発生と興隆には、権力側による言論の自由と学問の自由に対する厳しい弾圧があったという時代的な背景があり、学問の継続に対してある程度評価すべき点があるかも知れない。しかし、それを漢学の主流或いはすべてであると見なすべきではない。「是れでは漢学者といふ範囲も誠に狭いこと、思ふ」⁽²²⁾と、遠藤隆吉は「訓詁学」流の漢学を「田舎の学問！」すなわち閉鎖的環境下の学問的空間であると見なし、その現代社会での存在意義に対し否定的な見方を示した。

伝統的漢学教育の問題点のその三は、「読書のための読書」であるという。

「所が普通の漢学者になると云ふと、只書物を読むだけのことであつて、別に何の為に書物を読んで居るかを知らない。只昔の古い書物を読めば、それで自分は天職を完ふして居るか、さう心得て居る。』⁽²³⁾これはいわゆる「読書のための読書」の行為であり、はっきりした学習目的を持っていないが、読書そのものが目的で「天職」であると考えている人々の学習スタイルである。遠藤隆吉はこのような人々を「普通の漢学者」と表現したが、もっと明快な言い方で言うと、実生活への応用を考えていない「平凡な漢学者」か、または明確な学習目的を持たない「盲目的漢学者」とも言えよう。

問題点その一とその二は主に教える側の問題に対して、その三は教えられる側の問題であり、勉学の効果（社会に対しても、個人に対しても）に直結した問題でもある。なぜならば、遠藤の持論では、「何となれば、凡て学問は人間の便利の為に作つたものであるから、何等か人間の便利にならなければならぬのである。人間の便利にならない学問は皆廃れて了ふのである。』⁽²⁴⁾言い換えれば、人間は学問のためのものではなく、学問は人間のためのものであるという「学問」と「人間」との関係上の「人間中心説」⁽²⁵⁾を採るべき姿勢である。「読書のための読書」は学問の有用性をほぼ無視して学問そのものを「観賞する対象」「自慢する対象」にしてしまった結果、漢学の持っている有用性がうまく実用化されず、伝統的漢学を時代の変動の中で消滅させてしまう最も重要な原因の一つであると遠藤は考えている。しかし、このために漢学の有用性を否定すべきではなく、むしろ漢学を改造しなければならない理由であるという。「此等は漢学者其人が悪いのであつて、漢学が悪いといふ訳ではないのである。』⁽²⁶⁾

上述した問題点はいずれも漢学の日本での発展史とつながっているもので、中国およびほかの儒学文化の影響力の強い国々にも程度の差があっても共通している。

字句にこだわる「学問」は中国古来の儒学的主流であり、伝統的「学問の手法」でもあ

(20) 『漢学の革命』、頁三。

(21) 『漢学の革命』、頁三～四。

(22) 『漢学の革命』、頁四。

(23) 『漢学の革命』、頁六。

(24) 『漢学の革命』、頁六。

(25) 『漢学の革命』、頁七。

(26) 『漢学の革命』、頁七。

る。その影響で、日本に伝来してきた「漢学」は、当初は「書物の講義」が中心で、「儒学」そのものとの間には大きな相違がなかったという。「今試みに過去に遡つて考へて見ると、漢の時代の学者は何をして居つたか、又三国六朝より唐に至る迄の学者は何をして居つたかといふと、単に字句を引き出して来て其字句の講義をして居るに止まつたのである。宋以下の学者にしても多くは其れである。所が我が日本に到来つても亦漢学といへば先づ書物の講義をするだけで、其れが人間の思想に取つてどう云ふ利益があるといふことは必しも主とする所ではないのである。それを今より後漢学を書物から引き離して一般の人の精神中に入れやうとするのであるからして、漢学の革命と謂はなければならないのである。」⁽²⁷⁾ 遠藤隆吉がここで述べた「漢学を書物から引き離して」と漢学を「一般の人の精神中に入れやうとする」作業は、いわゆる「漢学の革命」の中身であり、その本質は漢学の知見の「実用化・生活化」さらに一般人民に普及する「大衆化」の方向へ漢学を変身させることを意味している。

「されば漢学が生命を保つには、今述べた一般人民の脳髓より外に活路はないのである。之を唯一の活路として之によつて一新生面を開いて大々の活動の余地を存することが出来るのである。」⁽²⁸⁾

「漢学の革命」を実現するには、「教育者」(教科書と教育法などを含む)と「学習者」はそれぞれの立場から双方向の努力をしなければならないと遠藤隆吉は考えている。

まず「教育者」側の努力内容について、遠藤隆吉は漢学教育は上述した日本での現状をそのまま放置すると没落の可能性があると考え、大きな危機感を抱いていた。

「若し漢学が単に漢学者に依つて維持されて居るのみであつたならば、此学者の数は時代を追ふて少なくなることであるからして、誠に心細い次第と謂はなければならない、細い生命を繋いで居るに過ぎない。」⁽²⁹⁾つまり、漢学を漢学者だけによって維持することは、その裾野はあまりにも狭いので、生命力が弱く没落していく可能性が高い。漢学にとって唯一の活路は、「書物から引き離して」大衆への普及である。このプロセスの中に、教育者は「漢籍」と「大衆」の間に、ただの架け橋となるだけではなく学問的な解釈者と精神的な伝道師の素質を兼ね備えなければならないという。

漢学の中身はほとんど二千年前から蓄積し始めた知見であり、その多くはすでに現代社会に通用しなくなった文章表現(いわゆる「漢文」、中国語では「文言文」)で記録されている。そのため、「書物から引き離す」第一歩には漢籍のテキストに対する「解釈」が必要であり且つ重要である。その上、漢学の精髓が抽象的な内容を中心とする「精神的」面にあるとすれば、現代社会を生きる人々に理解させるには、現代的な要素を取り入れて分かりやすく「解釈」し、場合によっては「翻訳」する必要もある。「殊に精神修養法の如きものは、西洋にはなくして支那にばかりあるのであるからして、これなどはもっとも發揮しなければならない。直接今日に应用することが出来る。また今日に应用できないやうな思想であつても、今日に应用出来るやうに解釈することが必要である。」⁽³⁰⁾この「解釈」

(27) 『漢学の革命』、頁一二。

(28) 『漢学の革命』、頁三四。

(29) 『漢学の革命』、頁三三。

(30) 『漢学の革命』、頁一九～二十。

の作業を行う際、現在の時代の状況と要請に「当て嵌まる」ことは最も重要な原則である。「言ひ換へれば、今日の時代に当て嵌めて見たなら如何あるかと云ふ様な解釈をして見ることが肝要である。」⁽³¹⁾さらに、遠藤隆吉は孔子の「君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり」の話しを例として取り上げ、それは「天皇陛下が総理大臣に向つて政治の要如何と問はれた時」の政治的提案であると説明した。

漢学の普及において、遠藤隆吉は「聴衆を満足させる」ことが重要であると考え、教育法の改革と工夫も必要であると薦めた。

遠藤隆吉から見れば、漢学の勉強は「学校の講義」と社会人である「一般人民」への「説教」の二つのアプローチ方法がある。「学校の講義」によって育てられるのは「教養」であり、「学生は一般に漢学の書物を読む力を養成する」ことができたが、「別に漢学の思想の影響を受ける必要はない」ので、漢学は「脳髓」に浸透した「栄養分」になっていない。つまり、「修養の方だけがあつて、応用の方はなかつたのである」⁽³²⁾。そのため、「其学生が社会に立つて活動する場合に当つては、之に広く一般に学んだ所を説教して聞かせなければならぬ」、この「説教」によって漢学は初めて「応用」できるようになる⁽³³⁾。

漢学「解釈」を行う際、「聴衆を厭ばせるやうな話」をするべきではなく、「只聴衆を満足させる話をしてやりたい」という努力は重要であると遠藤隆吉は考えている⁽³⁴⁾。これは聴衆を迎合するのではなく、聴衆に知見と教養を得る喜びを与え、聴衆に人生の糧を獲得した満足感を与えなければならないという目標設定である。漢学はそのような知見に富んでおり、文字と時代の障壁を乗り越えれば、それを手に入れることは可能であり、適切な「解釈」を通してそれを聴衆つまり「一般の人民」の実際の生活に「応用させる」ことができれば、それが漢学普及の到達点と考えられる。

一方、学習者側の努力について、遠藤隆吉は実社会・実生活へのワンランク上の「応用」をめざすべきであり、これを「漢学の革命」の目標と意義の一つとして位置づけた。その具体的な手法或いは心構えとしては、「精神修養法」にあるという。すなわち、どんな知識を身につけるためにも、他人の解釈と説明は重要だが、自己努力も不可欠である。漢学の精髓を身につけるには、自己努力による「精神修養」は最も重要な方法であり、それが漢学の精神重視の特徴に基づく学習法でもある。

ここでの「精神修養」とは玄妙な修行ではなく、ある精神により「自分の情調を養ふ」ことであり、「自分は一切の事に対して動することなく、平々坦々として世の中を渡ることが出来るやうにならうと思ふたならば、矢張り自分の心を陶冶して斯の如き状態に到らしめなければならないのである」⁽³⁵⁾。その具体的なやり方の例として、遠藤は「小事に齷齪して居る人が、他人の忠告を聞いて精神を大きく持つといふと、仕舞には其通りになつて来るものである」。「心の広い人を手本にするか、あるいは気の強い人を手本にするか、それは各人理想を懐くがよい」⁽³⁶⁾という。ここでは「平々坦々」「精神を大きく持つ」「心

(31) 『漢学の革命』、頁二一。

(32) 『漢学の革命』、頁三四～三五。

(33) 『漢学の革命』、頁三四。

(34) 『漢学の革命』、頁三五。

(35) 『漢学の革命』、頁五七。

の広い」「気の強い」などは重要なキーワードになる。どれも玄妙な、或いは哲学的な境地ではなく、日常の生活の場によく見かけ、見習いやすく、実践しやすい生活姿勢または人生観である。言い換えれば、修養とは「広い心」と「平々坦々」な態度を持つことであり、「手本」となる人間を見つけて習うことはもっとも身近な手法であると言えよう。

言うまでもなく、「学習者」はさまざまな階層・集団・職業・地域に属しており、性格と人生経験なども人によってまちまちであり、同じような教育効果を得るのはまず不可能である。しかし、「生きる」漢学の知見と教養が「一般人民」の中に根を下ろし、一般人民の思想に浸透することは大きな意義がある。

遠藤隆吉から見れば、「漢学の革命」を実現するには、「一般人民」の中にいかに根を下ろすかが最も重要な条件であり、「革命」の勝敗を左右するかなめでもある。それを実現するためには、キリスト教と仏教が良い手本になっている。「耶蘇教や仏教は皆人間の思想界に其生命を保つて居るのである。其書物を読む者は特別の学者に限ることで、一般の人に至つては其書物は読まないで、只南無阿弥陀仏や南無妙法蓮華経を唱へて居るのみである。」⁽³⁷⁾つまり、「教科書」は「学問」と「宗教」の主旨、経典であるが、「一般の人民」にとっては必ずしもそれを精通する必要はない。仏教の信者の場合、「真に仏教が脳髓に這入つて居るといふ者は果たして幾人あるか。釈迦の動機を知つて之を腹の中に入れて居る者は殆ど少ないことであらう。仏教の教えに従つて解脱した者といふものも亦少ない」⁽³⁸⁾、キリスト教徒の場合も似ている。つまり、堅い信仰の「ココロ」を持てば、教義などに精通する必要どころか、教義の趣旨を代表する理念や合い言葉を口先だけで表せば良いのである。これこそ宗教をめざすことをしない漢学の欠点であり、特徴でもあった。故郷の中国では、終始精神面では「学問家」だけの知識・教養として、実用面では人民の一部である「読書人」の出世（いわゆる「功名」）の道具として伝えられてきた「儒学」は、宗教の特徴に欠けており、宗教的影響力もほとんど持っていない。その関係で、「一般の人民」の「精神の内」には広がっていないのが弱点である。しかし、日本を含む海外に伝わってきた「漢学」は、学問の面では儒家以外の道家・法家などの学派の学問と、朱子学・陽明学など発展型の儒学の学問も取り入れ、伝統的儒学より広い裾野を持っている。また、科挙制度のような文官登用制度がない関係で出世の道具としての役割を持っていないため、そこには儒学以上の親民性の素地が潜んでいると言える。遠藤隆吉のいわゆる「漢学の革命」は、実際に漢学が内包している合理性と親民性を掘り下げて、さらにそれを「一般の人民」に浸透させようとする作業である。「是から先は漢学は一般の人民に知られなければならない。一般の人の脳髓に漢学の思想が這入つて、成程有難い教であると信ずるやうになるといふと、初めて漢学が日本人の中に勢力を有つて、生命を保つといふことになるのである」⁽³⁹⁾。

このような社会的・文化的意味を持つ「漢学の革命」は、伝統的学問の復活というだけでなく、伝統的学問に対する再解釈などを通して、近代社会に入ってから次第に多元化

(36) 『漢学の革命』、頁五六。

(37) 『漢学の革命』、頁三一。

(38) 『漢学の革命』、頁三二。

(39) 『漢学の革命』、頁三三。

した思想変動の流れの中に、改造されたアジア的・「東方」的価値観を再注入するとも言える文化的プロジェクトである。この「改造」と「再解釈」の作業は、遠藤隆吉が提唱していた「人文東洋主義」の神髄であり、近代社会で叢生した「国粹主義」「日本主義」「アジア主義」など諸思潮との根本的相違点である。これは一人の学者の力ではとても完成できない大掛かりな作業であるが、遠藤隆吉は一連の関連執筆活動を通して有益なスタートを切ることを試みた⁽⁴⁰⁾。

執筆活動のほか、遠藤隆吉は「余は実に会堂を設けて以て之を弘通するの必要あるを信ずる者なり」と言い、自ら講壇に立ち、漢学を解釈・宣伝する「漢学の伝道師」になりたいとも公言していた。「会堂」で漢学を「弘通する」ことは、教会のような大きい場所で大衆に漢学の意義と応用価値などを「弘く」宣伝し、人々がそれに「通ずる」こと（活用できること）を指す「伝道」的活動であろう。しかし、そのようなレベルの活動を実現させるには、時間的・理論的蓄積が必要であり、そのため遠藤は「暫く此意見を発表して以て世の識者に質し」、同時に執筆活動を着手し「最も通俗なる思想数十条を解説せり」⁽⁴¹⁾と言って、①執筆活動を通して徐々に影響を広げ、②将来的には大規模な宣伝活動を展開するといった二段階の「伝道活動」の段取りを考えた。

なぜこれほど漢学の「伝道活動」にこだわったかという理由について、遠藤は「漢学の運命は従来単に読書家の脳裡に制限せられたりしが余は実に此の思想をして一般人民の脳中に於て其生命を保たしめんとす。故に題して漢学の革命と曰ふ」⁽⁴²⁾。人民への宣伝、その宣伝を通して「漢学」の教養と知恵を人民の精神的財産となるよう努力する、そして、学問としての「漢学」の「知識としての更新」と「知識としての普及・応用」の二方面において新しい生命力を注入する。この発想は同時代の「漢学者」のなかでもほとんど見られることがなく、独創性に富んだ漢学の革命のカタチと言え、また漢学の革命プランとも言えよう。

三、革命の漢学

確かに、儒学を中心とする漢学には「守旧的」「保守的」なイメージが強く、「革命」とはかけ離れた文化の一つと思われることは多いだろう。しかし、遠藤隆吉の考えでは、それはあまりにも表面的な観察結果であり、漢学の中身をよく見れば逆の結論を導く可能性もあるという。

「孔子の言行は支那古代の封建制度に限らるゝもの多き」⁽⁴³⁾というのは事実だが、それもその時の時代の要請に応じて発言・行動した結果として理解すれば、必ずしも孔子とその学問は保守的・守旧的なものであると断言できない。「斯の如き時代に生まれた所の孔子であるからして、其時代の社会を治める様なことを言はれたのである」⁽⁴⁴⁾。むしろ儒学

(40) その一例は老子思想の近代社会への応用の試みであり、拙論「西洋背景下の遠藤隆吉の中国哲学史研究——西洋経験と近代日中交流における思想連鎖の一側面——」（『千葉商大紀要』第57巻第2号）に参照されたい。

(41) 『漢学の革命』、「序」頁二。

(42) 『漢学の革命』、「序」頁二。

(43) 『漢学の革命』、頁六五。

はその時代の現実に積極的に関与し、リードしようとする学問であり、同じ理由で考えると、「孔子が二十世紀の今日我が日本に生まれたならば必ず違ったことを言はれたであらう、今日の社会に適當することを言はれたであらう」⁽⁴⁵⁾。

漢学が中国・日本そして世界の各地に二千年以上脈々として継承された所以は、思想的・文化的な精髓・精華が内包されているためである。遠藤隆吉のまとめによれば、その精髓は主に以下の数点が取り上げられる。

漢学の精髓のその一は、「真の価値」があるというものである。

時代が激しく変動する近代に入ってから、日本を含む東アジア諸国ではいずれも漢学を敬遠する動きがあった。その理由はいくつか考えられるが、まず考えられるのは、漢学の持っている「尚古」的姿勢である。「漢学の書物は、孔子様初め皆古を貴尚ぶといふ思想であつた」。しかも、時代の発展によって、古今の時代情勢と社会環境が大きく変わっていて、古代聖賢たちの教えはそのまま通用しなくなった場合がほとんどである。つまり「明かに今日の時勢には反対のものである」⁽⁴⁶⁾。漢学者のなかに聖賢たちの昔の教えを無理矢理に今日の時勢に当てはめようとする人が多かったので、「漢学者といへば昔を尚んで居る頑迷固陋の人間である」⁽⁴⁷⁾というイメージが烙印されてしまった。

しかし、「尚古」的傾向はあくまで学問の表面的姿の一つに過ぎず、その尊ばれている「古」の中身は速い変化に慣れた現代人にはよく見落とされ、一律的に「時代に遅れた」ものとしての「保守的」「反近代的」思想傾向として受け止められる。そのような受け止め方には確かに一理あるが、あまりにも一面的な姿勢であると遠藤隆吉は指摘している。「一つ注意せなければならぬのは、漢学は実際昔の方が好いものが多いと云ふことである。」⁽⁴⁸⁾「何となく好い所があつて、後世に至るまで、真に崇敬して措く能はざる所がある」⁽⁴⁹⁾。遠藤はこのような「好い所」を漢学の「真の価値」と呼び、その中身を「自然淘汰の結果」として残された神髄であると考えていた⁽⁵⁰⁾。「古いもの」だから一顧する価値もないものとして漢学そのものを捨ててしまう時勢に反論の旗を立てたのである。

この漢学の「真の価値」はどこに体现されているかという点、[「仏教の思想に於ると同じく、やはり精神的滋養分として今日の人を満足させることが出来る」という「精神的滋養分」としての価値にあると遠藤は見ている⁽⁵¹⁾。しかも、漢学の「滋養分」は「耶蘇教や仏教にも負けない程の分量がありながら、「更に耶蘇教や仏教と違つた一つの特徴」がある。それは「宗教的の色を帯びて居らぬと云ふことである」⁽⁵²⁾。「宗教的の色」の是非は別の問題としてさて措いても、遠藤から見れば、漢学は宗教思想によく見られる信仰的排他性がなく、もっと大勢の人々に受け入れる可能性があり、その上、外の宗教的伝統

(44) 『漢学の革命』、頁六六-六七。

(45) 『漢学の革命』、頁六六。

(46) 『漢学の革命』、頁一〇。

(47) 『漢学の革命』、頁一一。

(48) 『漢学の革命』、頁一一。

(49) 『漢学の革命』、頁一一～一二。

(50) 『漢学の革命』、頁一二。

(51) 『漢学の革命』、頁三七。

(52) 『漢学の革命』、頁三七。

的思想より純粋な「精神的滋養分」を持ち、これこそ漢学の「真の価値」であるという。その「今日の人に精神的滋養分を与へやうといふことが」、「漢学革命の主とする所」であり、「目的である」⁽⁵³⁾。

漢学の精髓のその二は、雄大な「思想」と「精神」が内包されていることである。

漢学がしばしば現代の人々に敬遠される原因の一つはその内容の「古さ」である。けれども、遠藤隆吉はそれは大きな誤解であると説明している。「漢学の思想などといふものは旧世紀のものであつて、新世紀の人間の相手にすべきものではないと言ふであらう。けれども、それは大なる誤解である。漢学の思想と雖も今日に採るべきものが沢山ある。又少くとも今日の人の思想に影響を及ぼすといふことが非常にあるのである。」⁽⁵⁴⁾その具体的な内容は、精神の「雄大さ」にあるという。「其書物を読んで居るといふと、次第々々に精神が広大になつて来るとか、雄大になつて来るとかといふことは能くあることで、孟子が『居ること気を移す』と曰ふたが、それと同じ理合のものである。……つまり不知不識の間に好い文章は好い感情を起して来るのである。」⁽⁵⁵⁾「広大な思想」や「雄大な精神」とは、素朴な「表情」の裏に漢学の持つ視野の広さと洞察力の深さを示す分かりやすい説明であろう。西洋の近代的科学思想の特徴が具体的物事に対する理性的・思弁的の究明にあるとすれば、漢学の思想的特徴は世の中の物事に対する巨視的視野での抽象的、フエジー的解釈にあると言える。双方は相対立・相排斥しているものと見て、「洋学派」と「漢学派」、「旧学派」と「新学派」などの対立が近代以来多発したが、実際は相互補完的關係があり得るものであり、近代科学的論理で漢学を再整理・再解釈ができれば、漢学に新しい生命力を与え、近代社会に適應できる思想遺産の創世に繋がると考えられる。それに気づくことができた時に読者が「好い感情を起して来るのであ」ろうと遠藤が推測した。

漢学の精髓のその三は、「道徳」と「感情」を重んじることである。これは場合によって計算しきれない効力を発揮することがある。

「西洋学」と「漢学」の特徴を比較する時、誰もが気づくところの一つは、「西洋の学問はキチンと理屈を立て、言ふのが癖であるけれ共、支那の学問はさうでなく、ボンヤリ感情の上から言ふのが癖である」ということである⁽⁵⁶⁾。つまり、西洋の学問は可視的、計算的な「精密性」を持つことに対して、漢学など「東洋の学問」は、表面から把握しきれず、数字や数式では計算・推測できない「朦朧さ」あるいは「曖昧さ」が特徴となっている。また、漢学は難しい社会現象や思考的営為を説明する時、段取りを追って順序よく解いていく倫理的究明より比喩的な事例を挙げていきなり結論に結びつく比喩的論法が長けており、さまざまな政治的紛糾や社会問題を解決する時、政治的規則・法的拘束力など「外的パワー」より道徳・教養による自己修為を重んじることも特徴である。

漢学のこのような特徴は、大昔の知識人たちが外部世界を理解する際にさまざまな制限に縛られることに由来するものであり、いわば現実の物事に基づいて段階的、数式的に昇華し、そこから論理を立てることが無理であれば、身近にある事例に基づいて分かりやすく、

(53) 『漢学の革命』、頁四〇。

(54) 『漢学の革命』、頁一八。

(55) 『漢学の革命』、頁一八～一九。

(56) 『漢学の革命』、頁四一。

手際よく問題を解決しようとする「窮余の策」とも言える。漢の時代から中央集権の政府が道徳的手法を常用な統治手段として重んじたことも、思想的底流の一つになっている。

道徳・教養を重んじる特徴は、孔子など儒家の思想の中に特に色濃く表われている。物事に直面して対応を問われる際、「冷静なる思辨」か「即席的感情中心の対策」かと言えば、儒家の結論は往々にして「論理」より「感情的」判断を下したことがしばしばあり、「斯う云ふ風に孔子の言葉は感情の方面から言はれたのであつて、理屈の上から言はれたのではないのである」⁽⁵⁷⁾。その実例は、孔子が弟子たちに「仁」・「政」などの政治理念の中身について質問された際、その場その場の答えが異なり、学生それぞれの性格や特徴に即した答えを提示することが多かったことである。「孔子の思想は哲学上の思想といふ訳ではないので、自分の境遇の到れる所、若くは自分の精神修養の到れる所を言ひ表したものである」⁽⁵⁸⁾という解釈はこの視点から見れば理解できる。遠藤はさらに老子の「上善如水」の命題を取り上げ、「老子が上善如水といふて、水を以て標準とするといふことを述べたけれども、是とても理屈の上から言つては訳の分からぬことで、全く感情の上からして水を手本にせよと謂ふのである」と論じ、「東洋の哲学は自分の精神の到達した所を言ひ表はすことが多いのであるからして、勢ひ感情の方面から言を立てるやうになつて来るのである」と説明した⁽⁵⁹⁾。

このような回答の「不確定性」あるいは「ファジー的」特徴は、西洋の哲学に見る「 $1 + 1 = 2$ 」のような「明確さ」を欠けているため、学習者（弟子たち）に戸惑いや動揺を与える恐れがある反面、弟子たちの主導的思惟の反芻と類推によって、「 $1 + 1 \leq 2$ 」の結果をもたらす可能性も孕んでおり、予想以上の教育効果を得ることも不可能ではない。これはむしろ「東洋哲学」の長所であり、現代社会においても継承して大いに発揚すべき文化的遺産である。

こうして、遠藤隆吉は漢学の「近代化」と「一般の人民」の需要の間の接点を見いだすことができた。「吾人は実に漢学の思想の或者は之を近世的に解釈することに由りて以て一般人の精神的要求を満足し得ることを信じて已まず。」⁽⁶⁰⁾つまり、漢学を近代社会へ応用する可能性があり、それを通して「一般人の精神的要求を満足し得る」こともできるといふ発見であった。

その具体的な手法を探索するために、遠藤隆吉は『漢学の革命』を著し、「成るべく平易と通俗とを旨とし」、「漢学の思想を普及」しようとした⁽⁶¹⁾。

例えば、漢学の典籍をテキストとして利用する際、教育者側として教育法の面に気をつけなければならないことは、以下の数点があるという。

①学究的討議、すなわち長くて多義的議論を経ても明確な結論へとなかなか至らない学問的議論を避ける。このような討議は学問的発展には必要不可欠なものとはいえ、「結果」より議論の「過程」がもっとも重要視される傾向があり、一般の学習者の角度から見れば

(57) 『漢学の革命』、頁四四。

(58) 『漢学の革命』、頁四四。

(59) 『漢学の革命』、頁四六。

(60) 『漢学の革命』、「序」頁一。

(61) 『漢学の革命』、「凡例」頁一。

むしろ敬遠したい「過程」であろう。

②難解な漢文を読み解くには、文法的訓練の外、歴史の知識と出典に関する教養の蓄積が必要なため、漢文典籍の「文章」を理解するだけでも大きな山を乗り越えなければならない。漢文典籍の文章を分かりやすい表現（「平易」）と身近な現象や実例で説明すること（「通俗」）は普及の成敗を左右する要とも言える。漢学の普及（「漢学の革命」の第一段階のもので、その実践者は必ずしも「漢学の革命」を意識・実行している者ばかりではなく、むしろこの段階だけを目標とした者はほとんどだろう）はこの面において日本でも中国でも近代以来多くの人々が実践してきたが、効果はまちまちである。遠藤隆吉の行った実践は量的・質的とも最高レベルのものと言えよう。

③章節など複層的構造は複雑なテーマを論理的に説明するには「論理整然」で有効だが、各テーマの最終結論を理解するには論理面での反芻と整理の工夫が必要で、一般の読者にとっては接しやすいものではない。テーマを一話ごとに分けて順序よく展開していくのは「漢学の普及」にとって「革命的」手法で、読者本位の手法でもある。順序よくテーマごとに論理をうまく展開・発展させていけるかどうかは、執筆者の手腕が問われる課題であろう。

また、学習者側としての漢学の勉強法について、遠藤隆吉も自らの教育実践に基づき、かなり具体的なアドバイスをいくつか提示している。

例えば、「漢学の講義をしやうと思つたならば、成るべく暗誦させることが肝要である。」⁽⁶²⁾近代的教育学の視点から見れば、かなり復古的な勉強法と言えるかも知れないが、その理由について遠藤は次の二点を挙げた。第一には、「古書は自然的淘汰を経て今日に存在して居るものであるからして、読み易く又暗誦し易きものである」、つまり、内容の面から言えば漢学の経典などは時代の淘汰を経て精選されたものとして、「学問」としての価値が尊重されるべきであり、第二には、漢籍の多くは「口調が極めて好い」「暗誦出来得れば、口調が好いからして愉快を感じて来る」という勉学の「楽しみ」のような付加価値を持っていることである⁽⁶³⁾。科挙制度を官吏選抜の重要手段とした清朝末期までの中国では、儒学の学問を伝承する多くの「私塾」において、暗誦は確かに広く採用された大事な教育法だったが、遠藤隆吉は中華風「私塾」のやり方を踏襲することではなく、第一に、「暗誦と謂ふことは、文章を作る上にも極必要であること」⁽⁶⁴⁾を強調しながら、第二に、「其分量を少なくして暗に読ませる」ようと、「精読重視」の手法をも提示したのである⁽⁶⁵⁾。「希臘や拉典のやうな六ヶ敷いものを一時間に十枚も二十枚も読むといふことは、これは逆も出来難い話しである。……やはり初めから極綿密に之を読まして行く方が宜いのである。即ち一句二句を捉へて十分に之を了解せしめ、殆ど遊ぶ余裕がある位までにして、然る後に他に移るといふと、子供の精神に於ても愉快を感じて来るのである。漢学の講義に就いては自分は特に此点に注意してやうと思ふ。」⁽⁶⁶⁾と自らの実体験を例として教育法を説明し、「其の初めに於ては精密に、残る隈なく恰も硝子を透き通して見るやうに、

(62) 『漢学の革命』、頁八〇。

(63) 『漢学の革命』、頁八〇。

(64) 『漢学の革命』、頁八一。

(65) 『漢学の革命』、頁八〇。

(66) 『漢学の革命』、頁七七。

極めて徹底するやうに之を読むことが肝要だと思ふ。』⁽⁶⁷⁾と、「綿密」と「精密」がこの「少量精読主義」教育法のかなめであると強調した。

各種の学校での漢学教学法の実態を自らいろいろ見聞した遠藤隆吉は、近代日本の学校での漢学教育の問題点について、第一は、現行の漢文教科書は「多くの人の文章を寄せ集めて来るのであるから格調が違ふ」、「其上内容の聯絡がないからして、何となく精神が雑然として来る」ため、日本の「漢文教科書の不完全なること」であると言わざるを得ないという⁽⁶⁸⁾。その結果、「漢学の教科書は精神を紊乱することと思ふ」⁽⁶⁹⁾。この問題点を克服するために、遠藤隆吉は『硬教育』を執筆し、具体的解決法を示すことになったのである。

その第二は、現行の漢文教科書は「分量主義を採ること」にある⁽⁷⁰⁾。つまり、漢文教科書の編集者たちは漢文学習の「分量」＝漢文の「教養」のような発想から、「漢文教科書は一体の分量が極まつて居つて、一年間に之を講義しなければならぬ」という機械的なやり方を採った関係で、「余り進まぬときには学校に対して具合が悪い」、「又生徒の耳にも入り難いのである」⁽⁷¹⁾。

こうした問題点に対して、遠藤隆吉は主に以下の3つの改善策を提案した。その第一は、「漢文の教科書を改良する」ことであり、第二には、「教授法としては、成可く進ませず、暗誦せしむる」ことであり、そして第三には、「なるだけ沢山に話をしてやる」ことであるという⁽⁷²⁾。これらの改良策は、「教科書」「教授法」の二方面に分けられ、とりわけ第二と第三はいずれも「教授法」にかかわるものである。教授法が改善できれば、「漢文を普通の思想に近づけることが出来ると思ふ。」⁽⁷³⁾

いろいろな民族とさまざまな社会に受け入れられやすく、共鳴しやすい世界性を持っていることは、漢学が世界に広がり今日まで強い生命力を持つ理由の一つである。遠藤隆吉は日本人の例を通して孔子思想の世界性を見だして、「吾々の祖先はみな孔子といへば大聖人であつて、もう日本支那の境はない、世界を併呑して居る、一様に先生と仰ぎ師匠と尊ぶべき所の実に尊い人である」⁽⁷⁴⁾と述べ、また、「論語の如きも自然淘汰を経て今日に至つた書物であるからして、殆ど完全なるものとなつて居り、吾々日本人の祖先が既に数百年に亘つて之を研究しつゝあつたからして、論語といへばもう子供の時から読むべきものと云ふ様になつて居つて、外国の書物であるとは感ぜられない」⁽⁷⁵⁾と述べた。

しかしそれと同時に、孔子思想の民族性即ち、「中国」という歴史と現実の舞台に誕生・活躍していた事実も忘れてはならない。「孔子が今日の時代に生きて居ると仮定して見よ。即ち支那の流儀の辮髪を垂れて居るであらう。また支那の靴を穿いて居る。また支那人の服も着て居るであらう。……」⁽⁷⁶⁾と、孔子に提唱された思想と文化的外枠はあくまで「中

(67) 『漢学の革命』、頁七九。

(68) 『漢学の革命』、頁八二―八三。

(69) 『漢学の革命』、頁八三。

(70) 『漢学の革命』、頁八三。

(71) 『漢学の革命』、頁八三。

(72) 『漢学の革命』、頁八三―八四。

(73) 『漢学の革命』、頁八六。

(74) 『漢学の革命』、頁七〇。

(75) 『漢学の革命』、頁七二。

華的」なものであり、すべてを借用する必要はないと遠藤隆吉は指摘した。

「支那、日本の社会組織は昔から同じでないのである。日本は万世一系の皇統を戴いて居るし、支那は革命の国である。其上人情風俗が大変違つて居る。……故に支那人のいふたことであるからと云ふて、一概に之を日本の土地に持つて来ることは出来ない。よく其状態を測つて之を行はなければならぬ。支那人のやる所を見ても随分弊害のあることが多いのである。」⁽⁷⁷⁾

「賢人君子が教を立つるにしても其地方に適当な様な教を立つるのである。」⁽⁷⁸⁾

これは主に日中の民族性の違いに着目し、漢学を日本で応用する際、日本人なりの改造を施す必要があるという議論であり、漢学の日本での「現地化」への期待と強調であると言えよう。

四、「漢学の革命」の示唆

岡千仞は清朝中国の外交と対外戦争の失敗の病因を分析したとき、「唯中人不講富強之実政、格致之実学、居今世而行古道、驚虚文而忽实理。其為彼所輕侮、抑有故也（中国人は富強のための実際的な政治や、格致の実学を重視せず、今の世にありながら古の道を行い、形式だけの事柄を努め、実理をゆるがせにしている。彼らがフランス人に輕侮されるのも、そもそも理由のあることなのだ）」⁽⁷⁹⁾と言い、アヘン戦争敗戦後多くの中国知識人が伝統的学問を固守する姿を「居今世而行古道、驚虚文而忽实理」と例え、改革を拒否する姿勢はその最大の病因であると鋭く指摘した。

実際、近代中国では西洋の学問の先進性と有用性に気づき、積極的に西洋の学問から有益な要素を取り入れようとする知識人もいたが、1919年前後の五・四運動と「新文化運動」までには、圧倒的な影響力と当局者による強力な支援を持つ保守陣営からの攻撃を躲すために、西洋の学問のすぐれたところはいずれも東洋の学問すなわち漢学を源泉とするものであると称し、西洋の学問に漢学の仮面をかぶせて宣伝する手法を採らざるを得なくなったいわゆる「西学東源説」が存在していた。かつて日本の西洋化・近代化を絶賛した黄遵憲でさえ、西洋の学問は実に「墨翟之説」だったと牽強付会に説明したことは好例である。正々堂々と西洋の学問を規範として、ツールとして漢学（中国語では「中学」）を改造して近代社会に適用させる試みは、まさに「離經叛道（儒家の道理・道徳に背く）」のような「大不敬」なことであり、いわゆる「読書人」社会に対する重大な挑戦であり、許されない行為であった。このような社会的環境と文化的雰囲気の影響で、中国における「中学」に対する見直しと改造は、日本より数十年ほど遅れるというタイムラグを生じた。

1898年、戊戌維新が失敗した後、日本に亡命してきた梁啓超は政治的失意期を迎えたが、知識面では大きな収穫期に恵まれた。彼は日本到着後の当時を振り返って、「広蒐日本書而読之、若行山陰道上、応接不暇、脳質為之改易、思想言論、與前者若出兩人（広く日本

(76) 『漢学の革命』、頁七一。

(77) 『漢学の革命』、頁七四。

(78) 『漢学の革命』、頁七五。

(79) 岡千仞『観光紀遊』卷三。日本語訳文は、前掲「岡鹿門『観光紀遊』訳注——その四」、94-95頁。

書を集め読み漁り、まるで山陰地方の道を歩き、景色の変化が応接に暇がないほどのようだ。その為に脳質に変革が生じ、思想と言論は以前とはまるで別人のようになった」と述べ、日本滞在期の認識と知識面での変貌ぶりを披露した⁽⁸⁰⁾。梁啓超が読んだ「日本書」の中には、日本語に翻訳された「西洋の学問」関連の書籍が大半を占めると思われるが、日本人学者の手によって東西文明の「精華(エッセンス)」を融合して再解釈した「漢学ベース」の近代文明関連の書籍も含まれると考えられる。事実、梁啓超とほぼ同じ時代に日本で活躍していた革命家兼今文経学派(『公羊伝』を通して『春秋』に託された孔子の根本理念(微言大義)を究明する学問をいう)の「最後の大家」とされた章炳麟も重訂本『煇書・訂孔』の冒頭に遠藤隆吉の著書『支那哲学史』を取り上げ、「守旧」的学風への批判姿勢を賞賛した。これは「革命的」中国人儒学者である章炳麟による「漢学の革命」の提唱者である遠藤隆吉に対する認めとご褒美と言えよう。

民間のみではなく、科挙「出身」の清朝政府の高級官僚たちの中にも、近代日本の「政治」「学問」関連の書籍に対して、高く評価した人がいた。

1901年、地方高官の張之洞と劉坤一は皇帝への上奏文の中に、「縁日本言政言学各書、有自創自纂者、有転訳西国書者、有就西国書重加刪定酌改者、與中国時令、土宜、国勢、民風大率相近。且東文東語通曉較易、文理優長者欲学翻譯東書、半年即成、鑿鑿有拠、如此則既精而且速矣(日本の政治・学問を語る各書籍は、自ら執筆・編集するものがあれば、西洋諸国の書籍を翻訳したものもあり、また西洋諸国の書籍を添削・修正したものもある。中国の時勢、地理、国勢、民俗に大凡近い。且つ日本語は分かりやすく、文系・理系に長ける者ならば半年で理解・翻訳することができ、論理も確かである。誠に正確で速い方法であろう)」と近代日本の出版物が中国の近代化に対して示唆を与えるものが多く、中国で翻訳・出版する必要性を強調した⁽⁸¹⁾。

これらの動きは、ある程度、遠藤隆吉が提唱した「漢学の革命」を含む近代日本の漢学者たちによる「漢学の近代化」の波が、中国人知識人たちに与えた影響と示唆の表れと見ても差し支えなからう。

21世紀の現在、「漢学の革命」は遠藤隆吉によって提唱され、ちょうど100年の歳月が経った。伝統的学問としての漢学が時代の進展に従って新しい時代の需要に合わない部分を止揚し、「精華」と見なされる部分をバージョンアップして継承すべきことはすでに今日の社会的常識になってきた。今時の世界情勢を見れば、人類共通の価値観への追求と探索はかなり進んできた状況に見えるが、その反動として、ナショナリズムと自国中心主義の高揚は人類共同知の結集への妨げになる恐れがあることも否定できない。旧来の「学問」に「革命」を起こす発想は、未来社会に生じてくるさまざまな難問に対して、良い示唆を引き続き提供してくれるかも知れない。

*本論文は、千葉商科大学「2020年度学術研究助成金」を受けて行った研究成果である。

(2022.1.20 受稿, 2022.3.4 受理)

(80)『清議報』第35冊、汗浸録、2頁。

(81)「覆議新政有関翻譯諸奏疏」、張静廬輯注、『中国近代出版史料』二編、中華書局1957年、30頁。

〔抄 録〕

明治初期の日本において、朝野を問わず、「漢学無用論」のような考え方は多くの人々に浸透し、「伝統的学問」としての漢学にとって、危機的局面であった。遠藤隆吉は『漢学の革命』を著し、漢学は古代中国知識人たちの知恵の集約であり、人間の自己修養や社会生活、政治・経済・文化活動など多方面にわたり基本的または根本的な原理・作法などを内包しているため、中国人だけではなく、日本人や世界の人々にも有益性を持つものであると考えていた。彼は、伝統的漢学教育とその応用に関する問題点の指摘と、漢学の思想面での精髓の所在という2つの基軸から、漢学に対する近代的再解釈を中心とする「漢学の革命」の必要性を提唱し、自ら執筆活動と教育実践を行った。「革命的」儒学者である章炳麟ら中国側の知識人たちも遠藤隆吉の関連著述を取り上げ、その「守旧」的学風への批判姿勢を賞賛した。